



道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信 第5号
令和7年10月14日(火)
発行者 校長 宮田 純生

【С п а с и б о !】

1 学年職員

私がドイツに旅行へ行った時の話です。地下鉄に乗るために切符を買おうとしたのですが、券売機の操作が複雑で買い方が分からず、困ってしまいました。日本なら駅員さんに聞けるのですが、今いるのは海外。駅員さんもおらず、助けを求めることもできず、途方にくらっていました。すると、通りかかった女性から声をかけられました。言葉は分かりませんでしたが、指でさしながら買い方を教えてくれました。その時、気付きました。女性が券売機で設定していた言語が、ロシア語だったのです。

旅行に行ったのは2023年で、ロシアによるウクライナ侵攻が活発だった時です。その影響もあり、当時はロシア人に対する厳しい声が飛び交っていました。しかし、困っていた私を助けてくれたのも、ロシア人です。見知らぬ海外の地で、さらに困り果てていた私にとって、その女性の声かけがどれほどありがたかったことか。私は日本であっても、海外の人に声をかけるときは緊張してしまいます。だからこそ、この女性の行動はすごいと思うし、個人として尊敬できると考えています。ロシア人の女性に対し、私はその国の言葉できちんと感謝を伝えなかったな、と思っています。

「С п а с и б о ! (ありがとう!)」

ほっこりした話

2 学年職員

息子が幼稚園の頃の話です。

乗り物に乗ることが好きだった息子は、近所の1つ上のお姉さんとバス通園をしていました。しかし、帰りの時間は、1つ上のお姉さんとは別で彼は、一番最後の号車に乗ることが決められていました。

だんだんと彼の中に不満がたまり、ついにバス通園をやめたい。

おかあさん、送り迎えをしてくれというのです。不満の原因を聞いてみると、

お友達が次から次へと先に帰ってしまい、一人で遊んでいなくてならないこと。

しかも、一番最後の号車、一番最後の降車（幼稚園から遠い位置にある我が家）です。

そのため、家に着いてからお友達の家に行くにはとても遊ぶ時間が少なくなる。というのが理由でした。

なるほど、幼稚園児としては至極まっとうな理由であると思いました。

内心、『ん～遠いな！送り迎え・・・毎日か・・・雨の日もあるよなあ～自転車だしな・・・』と思いました。

しかし、息子のささやかな願いを叶えようと、送り迎えを始めました。正直、毎日の送り迎えは母も大変でした。

しかも、行きにちょっとした登り坂があり、向かい風の日は大変です。

そんなある日、「この坂いつも一生懸命こがないと進まないんだよね～」というと、「じゃ、僕が押してあげる！」

と後ろの荷台に乗っている息子が思い切り私の背中を押してくれましと。

物理的には軽くなるはずもないのですが、とても心が軽くなったこの場面を今も忘れることができません。



What is the weapon for a peaceful world?

3 学年職員

10/8(水)に埼玉県英語弁論大会に3年生の秋山さんと一緒に参加をしてきました。英語弁論大会では、それぞれの生徒が自分の思いを観客に向けて熱く英語でスピーチしていました。どの生徒の発表も内容がとても興味深く、心を引き付けられるものばかりでした。その中で、ある先生が全体に向けてこんな話をしていました。「今、世界では人種差別や戦争といった多くの問題が起こっている。そこで使われている武器は、銃や爆弾である。でも、それらは何も問題の解決策にならない。しかし、言葉には力がある。言葉は平和な世界を創る武器になることができる。」と。私もまた言葉はとても大きな力を持っていると思っています。言葉は時に人を死に追い込む凶器にもなり得ます。しかし、正しく使えば、人を笑顔にすることや世界を変えることができると思います。言葉は人類が使える魔法なのかもしれません。みなさんも自分の持っている魔法を正しく使って一緒に人を笑顔にしませんか。そして、世界に自分の思いや考えを伝えられるように、世界の人々の思いや考えを理解することができるよう英語を学んでみませんか。最後に…

English is the strongest weapon to tell your feelings and opinions to people in the world.

English is the strongest weapon to understand people around the world.

I think English can enable us to make a more peaceful world than the world where we live now.

「天国と地獄の話」

にじいろ学級職員

突然ですが、みなさんは、天国と地獄は本当にあると思いますか。私は、天国と地獄は、既に私たちの身の回りに確かに存在していると考えています。そして、「今、私のいる所は、天国なのだろうか、地獄なのだろうか」ということをいつも考えています。

そこで、今回は、こんなお話を皆さんに送ります。

昔々、あるところに地獄と天国を見学に行った男がいました。

まず地獄に行ってみると、ちょうど食事の時間でした。男は「地獄なんだから、たいそう粗末な食事なんだろうなあ」と思いましたが、テーブルの上に置かれた料理を見てみると、なんと、とても豪華な食事が所狭しと並べられているではありませんか。しかし、どうも様子がおかしい。地獄の罪人たちを見てみると、みんなガリガリに痩せ細って骨と皮だけになっているのです。「毎日こんなご馳走を食べていながら、なんであんなにガリガリなんだろう？」そう思ってよく見てみると、罪人たちは長さ三尺三寸、約1メートルもある長い箸を持っているのです。自分の腕よりも長い箸では、どんなに頑張っても口に食事を運べません。お腹ペコペコの彼らの目の前には、美味しそうなご馳走が並べられているのに、たったの一口も食べることができないのです。途中でこぼしては悪態をつき、目をぎらつかせ、「隣のやつの手が触れたからこぼれた。」などと文句を言うばかりで、とうとう小突き合いからけんかになり、一口も食べられないまま食事の時間が過ぎてしまいました。その後、テーブルの食べ物は悪臭を放ち、腐ってドロドロに溶け、食堂全体が真っ黒な汚い穴になって地面の底に落ちていきました。

次に、男は天国へ行ってみました。天国もちょうど食事の時間でした。テーブルの上には、地獄と同じように豪華なご馳走が並べられています。天国の住人たちの様子は、ふくよかでお肌もツルツル、みんな微笑みながら食卓を囲んでいました。ところがよく見てみると、彼らも三尺三寸、約1メートルの箸を持っているのです。男は、「地獄の罪人たちは一口も食べられず喧嘩になってしまったけど、天国の方々はどうするんだろう。」と思ってじっと様子を見ていました。すると、天国の住人はその長い箸で食事を掴むと、目の前の人に「はい、どうぞ。」と言って口に入れてあげたのです。「あぁ～美味しい。どうも有り難う。お返しにあなたにも食べさせてあげましょう。どれがいいですか？」と、お互いに食べさせ合っていたのでした。向かい合った者同士が、お互いに相手の口に食事を運びあっているのが、皆それぞれ十分に食べ、満腹してとても幸せな様子でした。

天国も地獄も状況は全く同じなのです。同じ食事を前にし、同じ箸を持ちながら地獄の罪人は怒り、傷付けあい、飢餓に苦しむのです。なぜでしょう。それは、自分の幸せだけを願うからではないでしょうか。他人よりも自分の方がより良い思いをしたい、そういう思いが地獄を作っていくのです。自分さえよければでは、幸せになれません。それどころか一人ぼっちになってしまいます。幸せの花は、いつも相手と自分との間に咲くのです。

最後に聞きます。皆さんがいるのは、天国ですか、地獄ですか。心掛け次第で、あなたのいる世界は、天国にも地獄にもなりますよ。

